大丈夫か、5号踏切

―港務所合理化の一環―

「三池鉄道」最後の常駐踏切（通称早米来踏切）の自動化工事が、いよいよスタートしようとしている。

かつては四山鉱、三井アルミの通勤でごったがえし、かなりの渋滞をきたしたものである。

今は、三井の合理化攻撃で通行量は半減した。しかし、自動化するには条件が悪すぎる。一般の踏切は通過するだけだが、この踏切の場合は、踏切内で停車、またはバックする車輌が実に多いのである。

一カ所に二つの踏切が平行しているし、踏切と踏切の間から、さらに一方に道路が延びている。

踏切の前方には低いガードがあり、Uターンする車輌も多い。アルミ地金輸送のトレーラー、ラワン材運搬の平ボテ、石炭運搬のダンプなど、大型車輌の通行は相変わらず多く、離合待ちのため踏切の直前で停車する車輌、一回でハンドルがきれないため、切り替わす車輌、一般の踏切では考えられない動きをする車輌があまりにも多過ぎる。

自動化に当たっては、列車の速度制限などが考えられているようだが、列車の速度が遅ければ遅いほど停車する車輌が多くなり、問題の解決にはならない。

一番危ないケースは、一列車が通過した後、次の列車が入って来る場合である。遮断機が下りかかっても、踏切では身動きできない車輌が出てくるケースは、今の条件では避けられない。

（港務所日通信員）

低い、狭いガード附近（踏切から）

時のことば

牛肉、オレンジ協定

牛肉、オレンジの対米輸入枠を定めている日米間の協定。四年ごとに見直されており、現在の第二次協定はこの三月で期限切れとなりますが、枠を撤廃して自由化を要求する米国と枠拡大で乗り切ろうとする日本側との間で交渉が続いています。現行協定は、八三年度に年間三百八百トンだった輸入牛肉を毎年六千九百トンずつ拡大し、四年間で九〇%増やすという内容。同様にオレンジも四年間に毎年一万千トンずつ枠を拡大することを決めていました。仮に牛肉、オレンジが自由化されれば、次はコメの自由化となるのも必至、との懸念も強まっています。

人物ルポ

悔なく、誇りをもって

朽網勝喜さん

○…職場・地域で「よく世話のとどく人」と知られ、第一鉱（元・三川鉱）で保安推進員をつとめてきた朽網（くたみ）さんが、三月三十日で定年退職を迎えた。

昭和二十二年の入社だから勤続四十一年。鉱山学校の機械科を卒業したが、大浦鉱の書記や仕繰工を経て、大浦鉱の閉坑とともに宮浦鉱へ。さらに宮浦鉱の閉坑によって三川鉱へ移った。その間、回収、仕繰、掘進などの職種にたずさわる。

○…最大の思い出である「三池闘争」の年に結婚。現在は、やはり炭鉱づとめだった父と母、奥さんとの四人暮らし。二人の息子もそれぞれの地で働いている。

○…三十八年から三池労組の中央委員に推され、そのころから組合運動についての意識的な勉強がはじまった。勝立の大砂社宅では地域分会の役員となり、その後地域分会長、天道校区議長などに加えて、民生委員、公民館、社会福祉協議会の役員なども二十年間におよぶ。

○…三十八年三川鉱大災害後の「CO闘争」の発展と財政づくりのための、いわゆるCOオルグとして実に十一年間、家庭を犠牲にしてまだ全国をかけめぐったのは、誠実さと責任感、頑張り屋の証しであろう。

○…「全国をオルグしたことは大きな財産になったが、労働運動の現状をみると残念」「労働運動の基本は労働者のためのものでなければならない。指導者とくにトップの指導性と、労働者意識を高め、学習し、活動家を作ってたたかう組合づくりこそ課題だ」と力説する。

○…「三池での分裂は、苦しみとみじめさを残した」「炭鉱では、生命を守るたたかいが最低限のたたかいだ」と、経験から得たさまざまな教訓を述べる朽網さんだが、今後の三池のありようについて「先行き不安で大変だけれども、どんなに少数になってもがっちり団結を守っていってほしい」と望みを托し、「三池労組は、遠慮なくモノが言える仲間がいた。自分にとっては悔いのない生活だったし、誇りでもある」と、たんたんと語る。

※　※

石炭政策、再考を

古賀裕康

安い海外炭と比較、国内炭は約三倍高いので、石炭政策の切り捨て見直しは、時代の流れからやむを得ないかな、と思っていたが、つい最近、考えが一変した。というのは、高い高いといわれている国内炭と、海外炭の炭価比較は、生産された時の比較で、海外炭を外国から輸送し、現場で使用するときのトータルコストは、一・五倍もないという。昨年一年間の一般炭輸入量は、二千五百四十二万四千トンで、国内炭総生産量の約二倍に上がっている。さらに、通産省の見込みでは、九州、中部、東北の各電力会社で、大型石炭火力発電などが予定されており、一般炭需要は急速に増加すると見込んでいる。しかし、これだけの石炭需要がありながら、第九次石炭政策では、石炭ゼロになる可能性が少なくない。

石炭は、日本唯一のエネルギー資源で、四十億トンの埋蔵量、まだ二百四十年は掘れる。国は、エネルギー政策確立、炭鉱都市と労働者を守る―という立場で、再考をしてほしい。

× ×

この一文は『西日本新聞』三月七日付の「こだま」欄に投稿されたもので、承諾を得て転載させていただきました。なお、掲載紙面では地方公務員とありましたが、古賀さんは現在大牟田市職労の書記長をつとめておられます。

あほーだら

芝岡夜徹

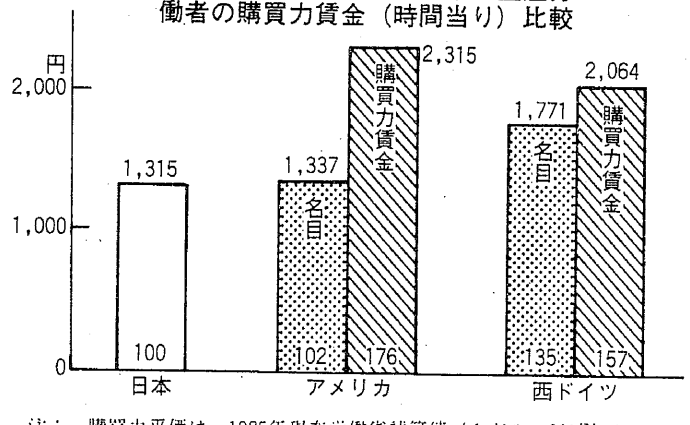
目でみる88春闘

日本の購買力＝低水準は明白＝

「日本の名目賃金はドル換算で世界のトップレベルに達している。春闘は賃上げより政策で労使協力を」と、日経連は早くも賃金抑制にやっきです。

ところが購買力平価でみると、日本を一〇〇とすると、アメリカは一七六、西ドイツ一五七で、日本の購買力は低水準なのがはっきりしています。レート換算と、実質的な賃金水準が上がったかどうかは無関係です。むしろ個別賃金（男子高卒、35～39歳）でみると実質賃金水準は七五年を一〇〇とすると、八六年は九七・三とマイナスに転落。まず賃金水準の回復と引き上げこそ大事です。

アメリカ、西ドイツ製造業・生産労働者の購買力賃金（時間当り）比較



注：購買力平価は、1985年現在労働省試算値（1ドル＝231円、1マルク＝91円）を1987年1～9月の消費者物価により、日米、日独の相対価格指数により修正、1ドル＝221.1円、1マルク＝91.5円

敬弔

毛利雪松さん（十一・九大災害CO患者＝七十四歳）は三月二十日、荒尾市民病院で逝去されました。謹しんで哀悼の意を表します。なお、遺族は荒尾市桜山町一丁目三の六に奥さんのマサエさん。